新韻集について

龜田次郎

一

近年、國語學の發達進歩に依て、斯學の各方面に諸種の發見や、新學說の唱道などが頻出して來た事は、誠に喜ばしい次第である。就中、我古辭書の研究や、延いては其複刻や飜刻が、續々と世に現はれて來て、此等の出現に依て、國語研究の資料を、愈、益豐富になし、我國語變遷史の研鑽に、大なる貢獻寄與をなす樣になつたのは、また近時、學界の壯觀ともいふべきものであらうとおもふ。今茲に自分が紹介するものも、亦足利時代に出來た一古辭書であるが、未だ一般に廣く世に知られてゐず、只、少數の專攻者や特志家には認められてゐても、其等の人々でも、尙餘り大なる關心を持つてゐない樣である。それで、自分は、此一古辭書に就いて、聊、鄙見を公にする譯である。

二

自分が、今、紹介する古辭書は、足利時代に出來た「新韻集」といふものである。此書は、今日、尙、寫本の儘で世に傳はつてゐて、未刊本である。其原本と認められてゐるものが、蜂須賀侯爵家に所藏されて、現今其舊領地德嶋市

に在る德嶋縣立光慶圖書館に寄託されてあるもので、所謂阿波國文庫本である。此書は元屋代弘賢の藏本であつたが、其歿後、他の藏書と共に蜂須賀家へ献納したものである。其徑路は、下の通である。

一代の儒者柴野栗山は、在世中、當時の德嶋藩主に、常に庇蔭を受けて居たのである。栗山が寛政年間から幕府の命を受けて、屢、京都奈良附近の社寺の寶物取調に出張した際、其手附として共に從事した屋代弘賢が、此出張中に、本書を手に入れて珍藏してゐたのである。此弘賢も、亦栗山との關係もあつたらうが、德嶋侯から始終庇蔭を蒙つてゐたのである。弘賢は世に周知の如く、非常な藏書家であつたが、歿後、其藏書の大部分は、生前に於ける關係に依て、德嶋藩へ献納されたのである。それで今日、蜂須賀家には、阿波國文庫本と稱して、數多の珍籍が所藏されてある所以である。本書の同家の文庫に存在するのも此の結果である。又蜂須賀家に於ける好學の藩主で珍籍を廣く蒐集されたのは、主に第十一代至央から第十三代齋昌までの間である。栗山や弘賢が厚誼を受けたのも、此三代の藩侯の中である。而して本書が獲得された土地や、其捺印に依て、今日、其著者の自筆原本と唱へられてゐるのである。蜂須賀家本の來由は以上の如くである。

此蜂須賀家本、卽ち阿波國文庫本の外に、傳寫本が二部ある。其一は、元黑川春村翁自ら寫した本で、珍藏してゐたものであつたが、數年前、翁の後裔から佐々木竹柏園文庫へ讓渡されて、現在同文庫に所藏されてゐる相である。是れ卽ち黑川春村本と唱へられてゐるものである。此黑川本は、自分は未見である。只、赤堀又次郎氏の名著「國語學書目解題」の本書解題中に、春村の奥書が抄錄してあるのを知るのみである。此奥書は、下の如くである。卽ち

新韻集二卷、寫校已竣、且以赭墨訂其訛謬、此書罕傳今得一家祕本謄寫、不違一畫、亦余書癖之所爲也。

此書世稱萬里居士所撰、今攷其音訓、的在文明年間、且撿其引用書、必是浮屠氏之撰則其言必然、序稱援詩韻、廣韻、字統、字林、韵集、韻略、聲韻、聲譜、今撿其書中、尙有周易、尙書、毛詩、論語、左傳、爾雅、老莊、淮南子、說文、杜子美、昌黎、東坡、山谷集、古文、猛岩恐碧岩誤林間恐林間錄程恐程子全書事恐事文類聚焉、雖違古訓者多、然的非近書、實可憑據、干附一言以爲家珍。

天保十五年歲次甲辰黃鐘上旬

藤原春村

である。

其二は、此黑川本と同本ともいふべきもので、此黑川本の複寫本である。それは、春村の親友であつた故敷田年治翁舊藏本で、美濃紙型に大分大字で記るし、上下一册に合本されてゐて、原本とは其大さも異り、原本の樣な黑格は全然無いものである。原本の比較的小型で、中本大のものを、複寫の際に、斯く大型に寫したのかも知れ無い。或はまた元の黑川本が、此の樣の型であつたので、其通りに寫したのかも知れぬ。自分は黑川本は未見であるから、確かな事はいへぬのであるが、蜂須賀本とは、大分樣式體裁が異つてゐるのである。此敷田本は、翁の歿後、其門下大阪豐國神社々司であつた故角正方氏の手許に他の遺書と共に所藏されてゐたのである。角氏昨夏逝去後は、如何なつたか知らぬが、今、尙、同家に存在してゐるであらうとおもふ。此敷田本は、先には、大正十年五月二十二日京大圖書館で開催の、故和田雲村翁追悼辭書類展觀會に出陳されてゐたし、又後には、昭和七年十月三十日大阪市高津宮社務所で開催の、敷田年治先生三十年祭遺著遺墨の展觀會の際に、翁の舊藏本出陳の中にあつた。自分は、此後の折の會場で、親しく閲覽したのである。自分の知つてゐる「新韻集」の所在は、此三部に過ぎぬのである。而も後の二者は、同

系統のものであるから、結局は、原本と認められてゐる蜂須賀本卽ち阿波國文庫本と、複寫本の元の黑川本卽ち今の佐々木本との二部に止まるのである。尙、此外に、世の公私の圖書館や文庫に珍藏されてゐるのがあらうが、今日これを審知する能はないのである。

自分は本論文に於て、此「新韻集」を紹介するには、所謂原本と認められる蜂須賀本、卽ち阿波國文庫本に依つて、專ら述べる次第である。此事は、寧、其眞相を知悉するに足ると信ずるからである。他の黑川、敷田の二本は後世の複寫本であるといふ理由からでもある。此點は、讀者諸彥の御承知を願ふ譯である。

「新韻集」の所謂原本と認められる所の蜂須賀家の阿波國文庫本は、上下二卷合本一册で、美濃紙袋綴の、縱七寸、橫五寸の大さで、中本より少し大型で、薄鐵色の紙表紙製本である。表紙の左端上部に、新韻集と楷書の黑書がしてある。題簽は無い。右端上部に四角の小白紙に小學一、と記るした小片が貼付してある。下方の小口に、新韻全の三字の黑書がある。此は後筆である。卷首には、阿波國文庫（朱印）不忍文庫（朱印）萬里（黑印）（陰刻）居士漆桶（陽刻）（陰刻）（黑印）の捺印が、上方から順次下方にある。又卷末四行目に、阿波國文庫（朱印）萬里〇〇（陰刻）（二字不明）（黑印）居士漆桶（陰刻）（黑印）の捺印がある。此等の諸捺印に依て、所藏者の移動の跡がわかるのである。本文九十四丁。上卷四十八丁、下卷四十六丁を一册に合册して、上卷は、「伊」より「乃」まで、下卷は、「久」より「寸」までと、外に詩文と題して、句や熟語を載せ、最後に、十三人の名を擧げてある。各一面、七行の黑格が引いたのに、每行八字詰に、漢字を記し、それに片假名で音訓が附けてある。只卷首の序文と、卷終の詩文との兩所丈は、其字數は、連記してあるから別である。此原本は、世に萬里集九の著述で、而も其自筆本であるといはれてゐる。其は、見返に

相國寺梅花無盡藏漆桶

萬里居士筆

とあるからである。然るに、また其左方に、

弘賢曰文化元年夏購以納不忍庫其謂萬里筆者譌矣印亦贋作明白余熟視之先萬里萬々乎紙墨字樣爲四五百年之舊物無疑也恐平他字類抄之祖乎

と記るされてあるが、これは本書獲得者屋代弘賢の筆である。弘賢は、斯く當初から萬里集九の著述説を疑はつてゐながらも、尙、四五百年以前の著作であると認めて居るのである。これより四十年後に、黑川春村は此弘賢の否定説に對して、肯定説を唱へて居るのである。卽ち、それは春村の寫した「新韻集」奥書の中に

此書世稱萬里居士所撰、今攷其音訓、的在文明年間、且撿其引用書必是浮屠氏之撰、則其言必然

とある。（國語學書目解題所引）弘賢の所説が正しいのか、春村の所説が正しいのかは、姑く、別問題として措いても、其當時を去る四五百年以前、先づ文明前後のものと認めた事は、兩人共に一致してゐるのである。又、縱令、萬里集九の自筆著作でないにしても、其捺印の存する點から察して、少くとも萬里集九の所藏本であつて、同人の時代以前の作と見るべきものであるとおもふ。又自分は、上記弘賢の「其謂萬里筆者譌矣印亦贋作明白」といつてゐるのは、尙、研究の餘地があるとおもふのである。兎に角、此「新韻集」の出來たのは、足利時代文明前後の頃である事は確かな樣である。又萬里集九の傳記は、故上村觀光氏の「五山文學小史」や同じ人の「五山詩僧傳」にも、詳しく見えてゐるから、茲に、改めて述べないが、其正長元年に生れて、其寂年は未詳であるが、文龜二年七十五歲まで生存してゐた事は明かであ

る。それで、此書の眞僞如何は、別問題としても、時代は合ふ樣である。彼の著作とすれば、其中年の四十歳頃のものであるし、又他人の著述とすれば、彼の不惑頃に出來たものである。況んや、此書の書法や用紙や體裁から見ても、足利時代の此頃の著述であることは明かに知られるのである。縱令、萬里集九の著作說が疑はれるにしても、彼の時代當時の作物であることは否まれないのである。此書の記事から考へても、當時の僧侶が編集したものであるのは、一目瞭然たる所である。茲に自分は、自己の懷抱を、聊、述べて置く次第である。

次に本書の內容については、上記「國語學書目解題」三百二十九頁に見えたのが最初である。それは、

しんゐんしふ　新韻集二卷　一名色葉集

釋　萬里撰すといふ、寫本

この書は、語をいろは順にあつめたる字書なり、そのうち「い」、「ゐ」を混じ、「え」に「ゑ」をあはせ、「を」に「お」をあはせたり、語は漢字にてしるし、假名にて音幷に訓をつけ、其訓にていろは順をたて、更に平字と他字とに別つ、熟字をあげたるもの、反切を付けたるもまゝあり、上卷は「い」より「の」に至り、下卷は「く」より「す」に至る、下卷の末に後附九枚ありて、句幷に熟語をあつめ、又光榮、俊光より賴義、義光に至る十三人の名のよみかたをあぐ

上卷のはじめには「新韻集」とありて下卷本文の終りには「色葉集終」としるし、句幷に熟語をあげたる終には「色葉集詩文之終」とありこの書一名を色葉集といひしなるべし。

とあるが、實に、能く其要領を示されてゐるのである。此赤堀氏は、此書の原本を見て、記るされたのであるか、或

は他の寫本を見て、記るされたのであるか、未詳であるが、其序文の抄錄や、又、黑川春村の奥書を揭げられた所から考へると、恐らくは黑川本を見て書かれたのであらうと察せられるのである。決して阿波國文庫本、卽ち蜂須賀家本の原本を、直接、閲覽して記るされたのでは無からうとおもふ。尙いふまでもないが、此奥書の文は原本には載つてゐないのである。

本書は、上記赤堀氏の言の如く、漢字の平仄辭書で、漢語をいろは順に列ねて、同音の「い」「ゐ」「え」「ゑ」「を」「お」を一つに合せてゐるのであるが、每語片假名で其音訓を示し、更に平仄に別けたものである。其目的は、本來、詩作用の平仄辭書として編集されたものであるが、後世から見て、また他方から當時の我國語資料を豐富に供給する所がある。活用や假名遣の變遷を初め、尙多くは無いが、六七種の片假名の異體などをも知らしめるものがあるのである。

本書の表題や見返に記るされた文句は、已に前に揭げた通りであるが、先づ本文の最初には、下の如き序文がある。卽ち

新　韻　集

噫昔蒼頡俶作二爾雅文質以降敎レ人無レ不レ以レ書契二詩韻一次レ之矣韻切之書其類甚夥也或有二詩韻廣韻字統字林一或有二韻集韻略聲韻聲譜一各以二聲響品彙爲二樞要一者也述作訓說難レ譜焉也爰借二千色葉七行四十八字之假字一而分二平仄之二門一以爲二一篇一名曰二新韻集一不分二四聲一啻以二平仄之訓解一爲二至要一耳也擴二書典一考二群篇一或載二其訓一也或字各而訓同或文均而釋異之謂乎雖然聞是寡理辭頗故差互舛錯尤多矣謹仰二制作一而已也

夫色葉者格五音大綱也五行之響八音之和也五音者所謂宮商角徵羽是則ト五智也五佛也五星也五方也五臓也五根也五色也五常也五味ト也八音者金石糸竹匏土革木皆以ニ樂器之名一也樂者伏義始而起之一禮樂行レ無之基人精之和也語曰樂云々々鐘鼓云々々乎哉馬融曰樂之所盡者移レ風易レ俗非ニ謂鐘鼓一而已也凡所亘音聲三昧僉レ則之者乎哉

である。此文中の語句で、書名を「新韻集」としたのは新しい韻集といふ意味である事、いろは順であるから、「色葉集」とも名付けたのである事、又此いろは順で平仄辭書を作つた事がわかるのである。次に上之韻、下之韻として、韻字が列記してある。此序文で、本書著作の主旨が知れるのである。書中の文字の排列は、いろは順であつて、「い」「ゐ」、「え」「ゑ」、「を」「お」を一に合せてゐるのであるが、只「る」の部丈が全く省かれてゐて、一つも文字が見え無い。これは脱漏した樣である。又各字の音訓は、其左右兩側と下部に片假名で記るされてゐるが、其片假名の字體に今日の字體に比べて異體のものが數種存する。其等は、假名字體の變遷史料の一となるものである。それは卜(ト)、又(ヌ)、子(ネ)、マ(マ)、ア(ア)、メ(メ)、せ(セ)の類であるが、此等は足利時代の字體を知る一資料である。又語彙の音訓を記るした片假名を調べて見ると、國語の活用や假名遣などの上に、大分變つた用法が見えるのである。此等は一々、茲に列擧するのは煩に堪へ無いから、只、此事丈をいつておく。此等の事實は國語變遷史の資料として亦看過すべからざるものである。卷末の後附九枚に記るされた句や熟語を擧げてあるものは、所謂、書儀の類のものである。又最後の十三名の人名の讀方は、只、少し讀み難いものを序に記るしたものに過ぎないとおもふ。

本書內容について主要な點は、概略、上述したのでわかるであらう。尙、各字每語について特異な所が多く存するであらうが、其等は、一々之を指摘して述べるのは、中々煩雜であるから、只、茲には、顯著な箇所丈の大要を記

るしたのである。尙詳細な事は、親しく本書の精讀閲覧を要する譯である。

三

漢語の平仄辭書としては、已に、前代の鎌倉時代の著作と推定される「平他字類抄」三卷がある。活字版の「續群書類從」八百八十七に收められてゐる。又嘉慶二年と其翌康應元年との奥書のある寫本も世に傳はつてゐる。此書は、各卷、稍、體裁を異にしてゐて、上卷は、天象付歲時、地儀、人、人體、人事、動物、植物、雜物、飲食、方角、光彩、員數、國名の十三部門に分ち、之を各平他に分けて、其下に漢字を其訓のいろは順に列らね、中卷は辭字の部であつて、先づ、いろは等の諸部を立て、之を更に平他の二つに分けて、字を收め、下卷は、全く別のものである。此書の部門は上卷の十三と中卷の辭字を加へて、總て十四となるのである。又いろは順の辭書は、已に以前に「伊呂波字類抄」以下の出現があるが、此いろは順にして、而も「ゐ」「お」「ゑ」を之と同音の「い」「を」「え」に併せた事は、弘和元年長慶天皇御撰の「仙源抄」が最初である。此は檢索の便を計られたものであるが、在來の辭書に於て、未だ、嘗て其例を見なかつた事である。此の同音假名の併記は、後世の辭書編纂に襲用されたもので、此事は忘れてはならぬ事柄である、さて、又、此「新韻集」は「平仄辭書」としては、前出の「平他字類抄」の上に一新機軸を施して、其分類體であるのを改め、全然、いろは順にし、更に「仙源抄」の同音の假名を一つに合併されたのに模倣して編集した樣である。それで書名をも改稱して、「新韻集」又、「色葉集」とした所以は、斯くの如くに、一機軸を出したので、新しい韻集、又いろは順の書籍といふ意味で名付けた事は、序文の文句で明かなのである。つまり此後出の「新韻集」は、前出の彼「平他

字類抄」よりも、一層手早く檢出出來る樣に、便利にした新機軸の方案を世間に示したのであるとおもふのである。此書名に依て、編纂者の意志の在る所が知られるのである。前出の「平他字類抄」は、分類體であつて、更に其前出である「伊呂波字類抄」のいろは別であるのとは、其組織を變へてはゐるが、其兩者の名稱を、同じく字類抄といふ事から見ても只其本質が、彼は國語辭書であり、此は漢字辭書である相異から冠らす所が、彼は伊呂波であり、此は平仄を知るための用法、卽ち平字と他字とを知るものであるといふ所から、平他と名付けた譯である。又兩書の部門も、唯、其數に多少はあるが、名目は兩者相同じく、語をいろは順に列ねた事も、漢字の下に片假名で、訓を加へた事も同じく、此下卷の門名も、亦、彼此同一である。要するに此「平他字類抄」は、彼「伊呂波字類抄」に眞似て、彼のいろはに分ち、次に部門を分けたのを變へて此には先づ部門を分ち次にいろは又は平他に分けて其使用の目的に能く適合する樣にしたものに外ならぬとおもふ。それで又彼の先出「平他字類抄」と此後出「新韻集」との關係は上記の「伊呂波字類抄」と「平他字類抄」との場合と其趣を異にして、本來が詩作用の平仄を知る爲の辭書で、全く同一目的種類のものであるから、單に其使用上、平仄兩字の檢出の便宜を慮つて、此後出の「新韻集」は、其前出の「平他字類抄」よりも更に一新式の方法を案出して編纂されたのであると考へる。尙當代に於て、此「新韻集」と前後して出來た「伊呂葉字平它」（明應十年の識語有り）や、「色葉文字」（寫本）などの類本も、他に存在するが、矢張、其當時の僧侶の著作らしい。此等は今、茲に述べない。只、斯る類本の在る事丈をいつておく。

四

此「新韻集」は、亦後世に及んで再轉の氣運が來たのである。それは同じ足利時代の末葉に、矢張、五山あたりの僧侶の手に依て「伊呂波韻」の編纂が成り、これが後の德川の世に、文藝復興の世運につれ、寛永年間に初めて刊行され、後、寛文、延寶、貞享、元祿、寶永、享保、寶曆、安永、天明の各年間に引續きに、其廣益本や增補本や改正本や掌中本の類が頻々と出板され、更に文政、天保年中から幕末、明治時代に至るまで、種々の板本の刊行があつた樣である。而も亦此「伊呂波韻」も「平他字類抄」や「新韻集」と同じく平仄辭書で詩作用に供するものであるが、此「伊呂波韻」は或點では寧、其編纂の上に於ては其組織を復舊した樣である。卽ち「新韻集」では、只、單にいろは順に語を列ねて部門分は無いのであるが、「伊呂波韻」の當初の刊行では先づ部門分をして平他兩字を、同一紙面の上下に區劃して排列し、それをいろは順に列ねてゐるのである。つまり、「新韻集」が極めて簡易に、いろは順丈で平仄の兩字を檢出する樣にしてゐたのを、「伊呂波韻」では縱令、其部門の名稱や數は「平他字類抄」とは異つて、且一つ少いとはいへ、下の如くに乾坤、時侯、氣運、支體、生植、食服、器財、光彩、數量、態藝、虛押、複用の十二部門に分けて、其當初の刊行では平他兩字を同一紙面の上下に區劃して之をいろは順に列ねてあらはしたのである。閲覽上には至極便利に出來上つてゐるのであるが、其部門分をした所は、復舊したといはねばならぬのである。此「伊呂波韻」に採用した部門分は、前出の「平他字類抄」のとは異つてゐるが、何に依據して行つたのであるか。此部門分は虎關禪師の嘉元四年（改元德治元年）に成つた「聚分韻略」のと全く同一であるから、自分は此前出の韻書「聚分韻略」に依據して此「伊呂波韻」に採用したものとおもふ。而も「聚分韻略」は後世大に行はれた韻書であつたから、其に依據した部門分を襲用した事と考へる。又「新韻集」と同時代文明十六年に成る大伴廣公著の「溫故知新書」は、五十音順に排列した最初の假

名引辭書であるが、此辭書にも亦十二部門分を採用し、而も亦其名稱は「聚分韻略」のと同一で、「伊呂波韻」にあるのと全く同一である。此部門分が、當時、世に盛行してゐた「聚分韻略」に見えたのを、共に採用したものとおもはれる。「伊呂波韻」はいろは引平仄辭書で「溫故知新書」は五十音引國語辭書であつて共に假名引のものであるが、兩書また同じ部門分で分類してゐる點は、この當時の風潮であつた事がおもはれるのである。

上述の如く後世、此「伊呂波韻」の刊行頻出は印刷術發達の結果にも基因するが、また他方から見れば、文藝復興の氣運の致す所といはねばならぬ。自分は、此「伊呂波韻」より先出で、而も此よりは更に簡便に出來てゐる「新韻集」が只、「伊呂波韻」に比べて、同一紙面に上下に區劃しない點が、聊、閲覽上不便であるとはいへ、遂に世に行はれず、其書名すら知る人稀で、其影を潛めて、殆んど湮沒同樣の運命に陷つて、獨、「伊呂波韻」のみが、其流行弘布を專有したのは何故であるか。これは當時、戰亂の世でもあつたし、且、また、出板印刷の術も至つて幼稚困難の際でもあつたし、加之、世は學問衰微の極でもあつたからである。斯る時代のために、折角の名著も世人に顧みられなかつた譯であらう。畢竟時代世運の致す所であつたのであらうと考へる。誠に痛恨の至である。社會百般の事柄は其時の適否如何に依るものであることを、自分は痛感する次第である。

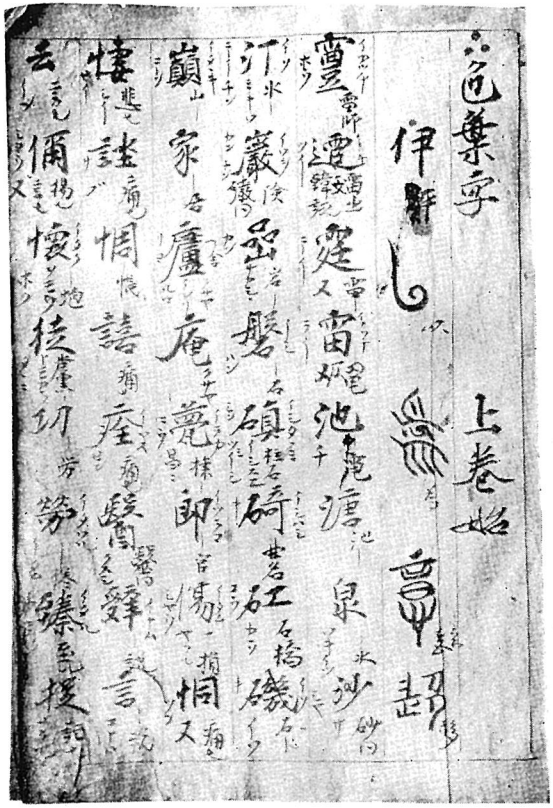
五

以上縷述した所で、「新韻集」については、大體、わかつた事と思ふ。本書は足利時代に現はれた一種の假名引漢字辭書であつて、其本來の目的は、詩作用の平仄辭書である事は明かである。然し今日から之を見ると、其本來の目的

から離れて、我國語の變遷を知る上に、數多の貴重な資料を供給する所がある。活用や假名遣や異體假名を初め、漢字の音訓の上に、多くの新事實を吾々に敎へる所がある。加之、本書は又、我辭書史の上から見ても、一種の新機軸を出した特異の點を具へてゐるのである。當代に創めて出現して、後、德川時代までに頻出した「和玉篇」や「節用集」やまた「下學集」の如き此等の通俗三大辭書と等しく、國語史研究者には有益な典籍である。只、本書は時勢の然らしめた爲めか、終に世に知られずに、殆んど其存在すら後人にわからずになつてゐたのである。自分は本書の貴重すべきものである事を、痛切に感じ、其闡明を促し、延いては其刊行飜刻を切望して居る者である。近年平安朝以後の古辭書を初め、近くは德川初期までの所謂古本の「節用集」の類は、續々と飜刻出板され、研究されもしてゐるのである。それで自分は、已に、二三の同好の者に、此刊行を話した事もあり、又數年前には、文學士三ケ尻浩氏が、稀有貴重な國語學書を、大分、刊行された際にも、屢、本書の公刊を勸めたのであつた。同氏も之が出版を欲せられて、其出版の豫告まで發表されてゐたのであつたが、遂に今日まで其刊行を見ない樣である。誠に遺憾の極である。それで自分は先年來、本書を精細に閲覽して、愈、益、其有益な典籍である事を信じ、原本保管の光慶圖書館に、再度、出張して、同館長今田好太氏に懇請し、其全篇撮影の許可を得、今春、京都東方文化研究所の佐々木建二氏を煩はし、出張撮影を依頼して、其業を完うしたのである。それで自分丈の希望素志は遂げられたのであるが、尙、廣く世の研究者にも、本書の眞價を認識して、偏く、世上に弘布の擧を講ぜられたいものである。未だ、其世に知れ渡らないのは、本書原本が、四國の一隅に珍藏され、而も門外不出のものであるためと、其類本も亦至つて少く、中々其閲覽が六ケ敷い樣な譯とに基くものとおもはれる。又古辭書研究者の中には、本書を餘り重用せずに輕視してゐる人もある樣で

ある。殊に甚しきに至つては、其論文に、只、僅々十數言を費すのみで仕舞つて居る者すらある。自分は實に意外におもふのである。斯る狀態になつてゐるのは、元來、本書が詩作用の平仄辭書であつたので、其漢字辭書といふことで、國語辭書でないといふ點からでもあるかも知れぬが、然し、また他方から見ると、今日に於て、其內容の記載の音訓や活用や假名遣などの上から觀察して、我國語研究に、幾多の有益な資料を供給する所があるとおもふ。最近、續々と飜刻せられる古辭書、就中古本「節用集」に讓らないものがあると信ずるのである。それで、自分は、此稀有貴重の一古辭書の飜印公刊を望むや切なるものがある。自分は本月下旬に、大阪に於ける同人の靜安學社例會の席上講演を依賴され、其出講の約束した上に、又本學の學報編輯部からも今度の誌上に、何か寄稿を求められ、それも承諾したので茲に急速に思ひ立つて、此等の約を果さんがために、本篇を草した次第である。尙、粗漏脫略の箇所が多々あるであらうが、それらは、他日の補正に讓る事にした。終に臨んで、本書の撮影に關して、快諾許可をして下された今田館長、並に其撮影を完成された佐々木氏に對しては、謝意を表するのである。（昭和十六年五月十日稿）

首　卷



首卷上